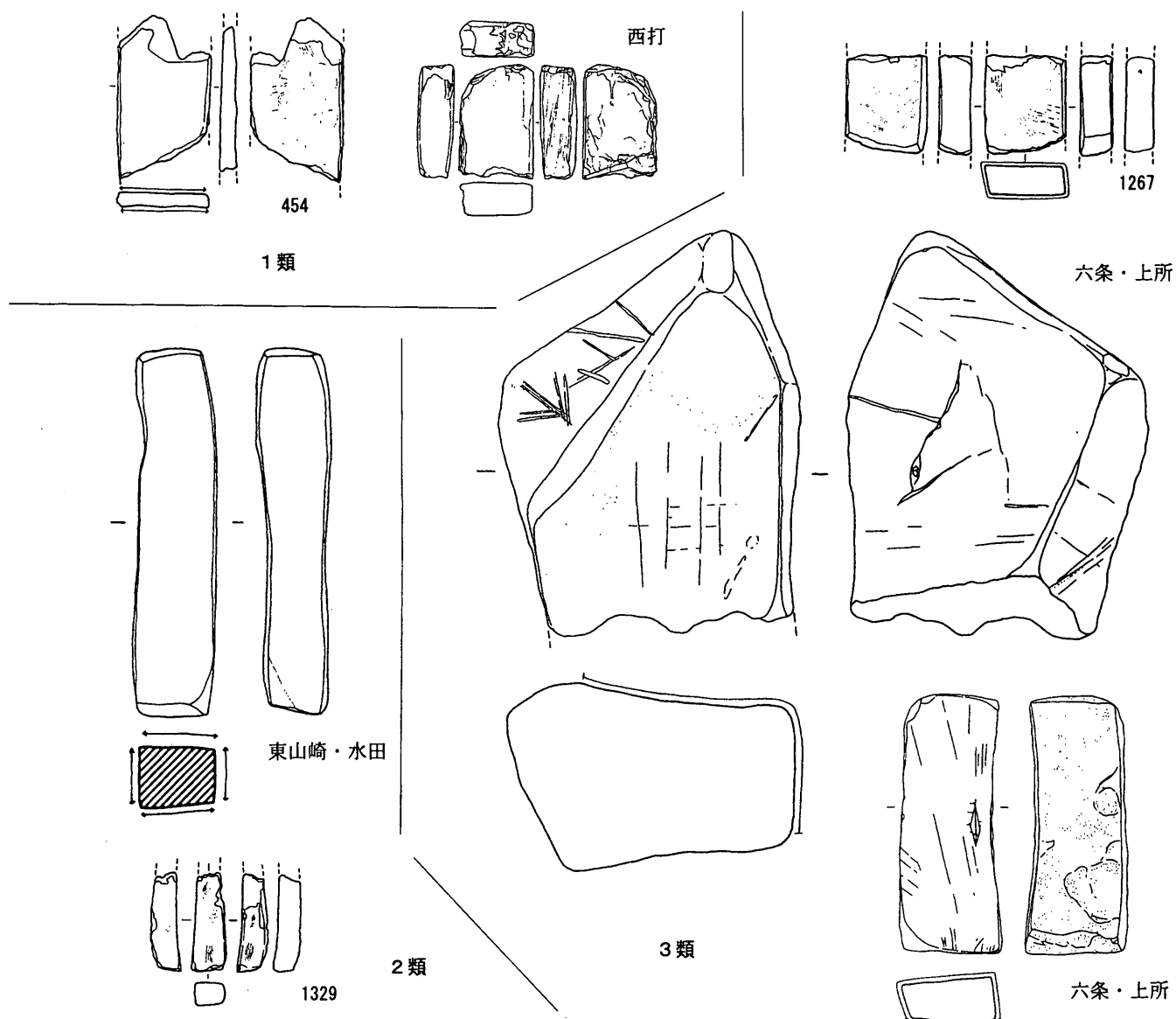


第2節 高松平野中世遺跡出土の砥石について

1. はじめに

中世遺跡から出土する砥石については、産地同定や流通から見える社会背景の分析といった視点からの研究が進んでいる（福島 1996・汐見 1999・田中 2000）。

ここでは、高松平野の中世遺跡から出土する砥石について分類を行い、そのうち確実に搬入品であると判断できるものについての出土比率（量）を明らかにすることで、平野内における砥石の流通状況を明らかにすることを目的とする。



第252図 砥石分類図 (S=1/3)

2. 分類

ここでは、砥石の石材と形状から分類を行った。砥石の石材と形状は、産地と機能的側面（粗砥・中砥・仕上げ砥）に結びつくと考えるためである。

1 類

頁岩、もしくは緻密な流紋岩を石材とし、両長側縁長が約1寸（約3.03cm）強の短冊形を呈するもの。長側縁の側面には、成形時の鋸（弦鋸）痕と思われる線状痕が認められる。1面もしくは2面が使用され、側面4面に使用痕は確認できない。

石材・形状の特徴から、大工道具の様に繊細な刃先を要求されたり、古来日本独特の「引いて」切る刃を付けたりするのに適している（汐見 1999）「仕上げ砥」として用いられたと考えられ、福島 1996 での「頁岩製砥石」に合致する（註 1）。また、現京都市右京区北西部の愛宕山を中心とした一帯で産出される「鳴滝砥」（汐見 1999）もしくは「京都産砥石」（田中 2000）である可能性が高い。

2 類

基本的には白色～淡褐色の流紋岩を石材とする。方柱状を呈し、長辺に隣接する面 1～4 面に使用痕が見られる。度重なる使用のためか、長辺部分が大きく湾曲するものも少なくない。

刀鍛冶が中磨で使用する他は、包丁・鎌・鉋等の刃物をはじめ陶磁器の器面の仕上げや調整に使われ、日常品の調整や保守に使用される事が多い（汐見 1999）中砥に用いられたものと考えられる。福島 1996 での「流紋岩製砥石」に対応する。

3 類

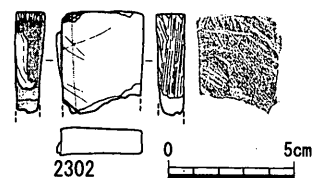
安山岩・砂岩を主な石材とし、基本的には方柱状を呈するもの。ただし、2 類に比べて規格性が乏しいためか、形状・大きさにはばらつきがみられる。1267 のように安山岩製で 1 類を模したような板状のものも含む。

中砥もしくは荒砥（註 2）として使用されたと推測できるが、明確な根拠はない。

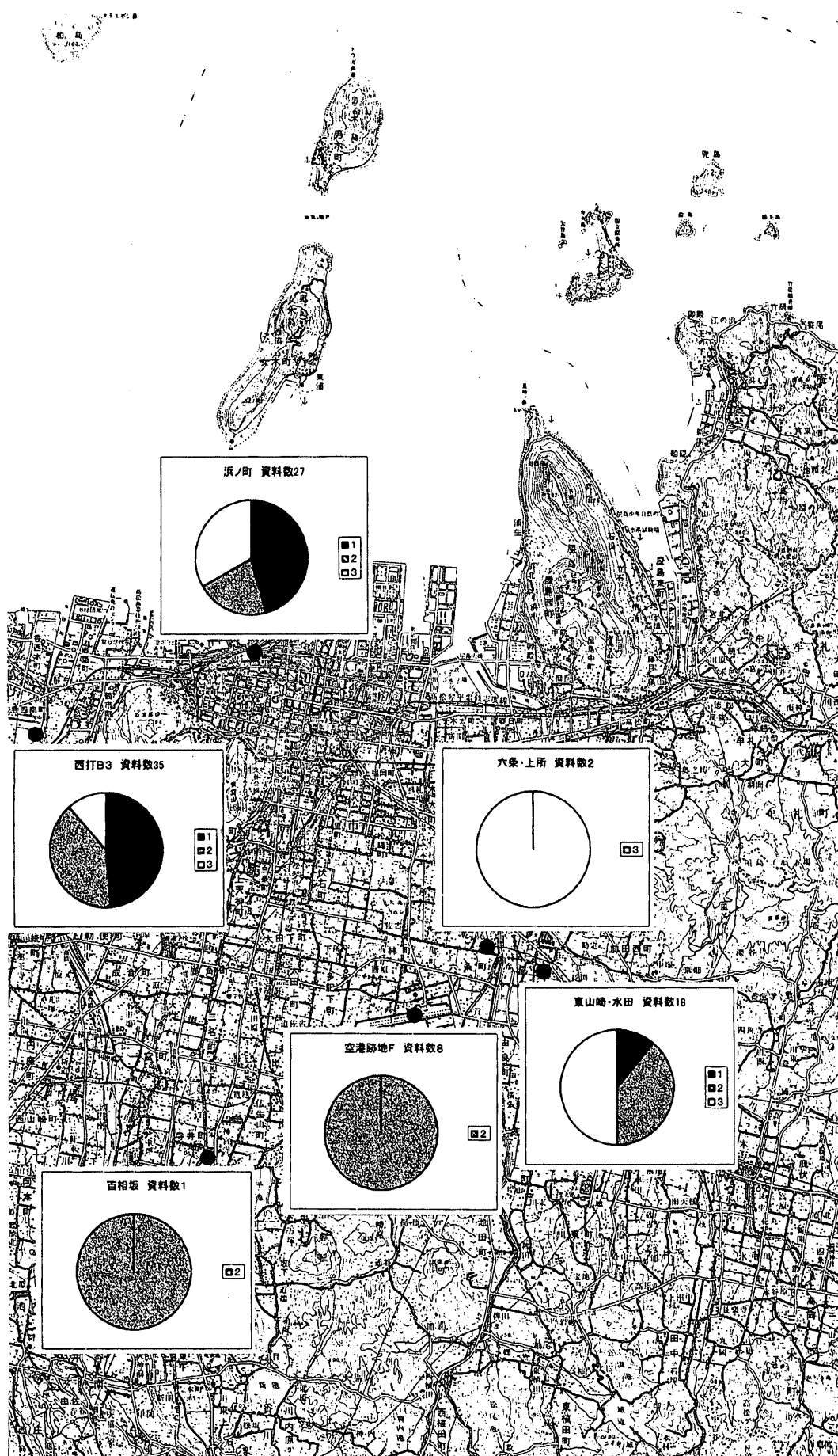
3. 1 類砥石の流通

東山崎・水田遺跡からも少量出土しているが、浜ノ町遺跡と西打遺跡では出土砥石の半数近くを 1 類が占める（第 254 図）。

1 類の石材である頁岩や緻密な凝灰岩は県内では産出しないため、搬入品であることは間違いない。さらに、特徴的な成形技法と規格製から京都産砥石である可能性は高い。平安京での分析によれば、京都産砥石は 9～10 世紀に出現、13 世紀に普及し（田中 2000）、ほぼ同時期に他地域にも流通すると思われるが、高松平野では限られた集落にのみ流通していたことがわかる。この砥石は、仕上げ砥であると推測できることから「一定量出土すれば、大工道具や日常生活に不可



第253図 漆による接合が認められる砥石



第254図 高松平野中世遺跡における砥石出土比率図

欠な小道具としての刃物が充実し」、「種々の物を日々消費する状況が想定」できる（汐見 1999）とされている。しかし、浜ノ町遺跡からの出土資料（2302）、および草戸千軒町遺跡出土の頁岩製砥石の一部には、漆による破損部分の接合が認められ（註3）、同様の痕跡が2・3類にみられないことは、1類のみが補修を施されていたことを示している。接合された破損部分を見れば、破損したとしても砥石としての機能にはさほど影響がないと思われるため、板状の形態に固執していたためと考えられる。このことは、1類砥石が稀少品で、保持することに一定の意味があった可能性を示唆しており、1類砥石に機能的な側面以外の評価が必要であることを示している。

なお、浜ノ町遺跡出土の1329の石材である褐色の流紋をもつ流紋岩は県内では産出しない（註4）。さらに、結晶片岩製の砥石もみられることから、浜ノ町遺跡には様々な産地の砥石が流入していたことが指摘できよう。

註

- 1 1類の石材については、草戸千軒町遺跡出土砥石との肉眼観察による比較を行った。その結果、石材は数種類に分類できるものの、浜ノ町遺跡1類は、全て草戸千軒町遺跡での頁岩製砥石（福島1996）と同石材であるとの結論を得た。
- 2 荒砥については、金属製品の初期研磨に多く用いられ（福島1996）るものを指す。3類が福島1999での「砂岩製砥石」・汐見1999での「荒砥」含まれるのか否かについては判断できなかった。
- 3 この点については乗松が確認した。
- 4 この点については谷山譲氏にご教示いただいた。また、現愛媛県砥部町付近で産出される「伊予砥」である可能性もある。